

「心の理論」は必要か

山本 政人

はじめに

2013年の『発達135』（ミネルヴァ書房）において、「いま、あらためて「心の理論」を学ぶ」という特集が組まれた。その中で、内藤は自閉症の「心の理論」欠損仮説について複数の疑問点を指摘し、「心の理論」の指標である誤信念課題では自閉症児の社会性障害を説明できないとしている。これに先立ち、内藤（2011）は次のように述べ、誤信念課題を用いた「心の理解」の研究を否定している。

こうした知見を冷静に重ね合わせれば、誤信念課題や心の理論課題が心の理解のリトマス試験紙になりえないことは明らかである。誤信念理解は、前段階とは不連続な概念変化を表すわけでも、いかなる文化・言語環境でも同一な発達の軌跡を反映するわけでもない。ましてや、その達成が心の理解の最終到達点ではありえないのである。

『発達135』の特集は、「心の理論」研究が開始されて約30年が経過したことを契機とし、改めてその意味を保育、教育、臨床に関わる人に知らせるために組まれたと子安は述べている（2013）。この特集では、複数の

「心の理論」は必要か（山本）

日本の研究者がこれまでの「心の理論」の研究を紹介し、その意義を強調している。その中で内藤の指摘は異色であるが、それでもその論調はこの特集の趣旨を理解してかなり抑えられているのではないかと思われる。

30年の歴史があり、日本の発達心理学においても主要なテーマの1つとなっている「心の理論」の研究に対し、内藤のような否定的見解が提起されていること、また、研究が活発に行われてきたにもかかわらず、「心の理論」について改めて解説が行われていることは、「心の理論」研究が曲がり角に来ていることを意味するのではないかと考えられる。小論では、日本の「心の理論」研究の歩みを概観し、その実像を明らかにしたい。

1. 「心の理論」研究 30年

日本の心理学研究者に「心の理論」が広く知られるようになったのは、1997年の『心理学評論 40』の「心の理論」特集からではないかと思われる。巻頭言において、子安は「心の理論」研究の始まりを Premack & Woodruff (1978) の「チンパンジーは心の理論 (theory of mind) を持つか？」という論文であるとし、その後、①霊長類における「心の理論」の比較認知心理学的研究、②ヒトの幼児における「心の理論」および心の理解の認知発達心理学的研究、そして③自閉症児における「心の理論」の認知神経心理学的研究の3領域における研究が行われてきたとしている。2013年の『発達 135』の巻頭でも子安は同様の総括を行っている。ただし、③の自閉症児の研究に関しては、Gernsbacher ら (2005) が、「心の理論」の欠損がすべての自閉症児に共通の特徴でもなければ、自閉症児のみに固有にみられる特徴でもない結論づけていること、さらに Milligan ら (2007) のメタ分析によると、「心の理論」は言語能力によって予測され、その逆ではないことが示されていることが紹介されている。

自閉症児の「心の理論」に関しては、内藤も同様の見解を示しているが、従来、心理学のみならず小児精神医学領域においても、自閉症児の「心の

理論」欠損仮説は注目されており、それに対する否定的知見が出てきたことのインパクトは小さくないと思われる。

自閉症については、かつて認知・言語の障害が一次障害であるという「認知障害説」が有力視されていた。しかし、高い認知能力や言語能力を持つ自閉症者が注目されるようになり、この説は過去の遺物となった。それに代わって出てきたのが、Baron-Cohen らの「心の理論」欠損仮説である。Baron-Cohen ら（1985）は高機能自閉症児に誤信念課題を用いた。誤信念課題とは次のような課題である。サリーという名の人形がおはじきのある場所に置いて部屋を出る。するとアンという名の人形がやってきておはじきを別の場所に置いて出ていく。そしてサリーが戻ってくる。これを見ていた子どもに「サリーはおはじきをどこで探す？」と尋ねる。サリーが自分の置いた場所におはじきがあるという誤った信念（サリーからすれば誤っていない）を持っていることを子どもが理解しているかどうかを測るものである。定型発達児とダウン症児のほとんどがこの課題に正答した。ところが、自閉症児では 20% の子どもしか正答しなかった。Baron-Cohen（1995）は、この課題が「心の理論」を持っているかどうかを検査する「リトマス試験紙」であり、この課題を通過できない自閉症児には「心の理論の仕組み（Theory of Mind Mechanism: ToMM）」が欠損しているとした。そしてこの仮説について日本で最初に検証を試みたのが Naito（内藤）らであった。

Naito ら（1994）はスマーティ課題を改変した 3 つの課題を用いた。歯ブラシの入っているチョコレート箱を見て他児は中に何が入っていると答えるかを問う課題、テーブルに置かれたとても軽い石の模型を見て他児は重いと答えるか軽いと答えるかを問う課題、水の入った牛乳パックを見て他児は中に何が入っていると答えるかを問う課題である。3 歳から 5 歳までの定型発達児と 65 名と 7 歳から 19 歳までの自閉症児 22 名が対象となった。定型発達児は年齢が上がるにつれて課題通過率も上がったが、ほとんどの自閉症児は他者の誤信念の推測に失敗した。この結果は海外の先

「心の理論」は必要か（山本）

行研究とも一致し、Naitoらは「心の理論」の発達には文化が異なっているとしても類似しているとしている。このような結果を得たにもかかわらず、内藤は冒頭で述べたような否定的見解を持つに至る。

日本において定型発達児に誤信念課題を実施した最初の実証研究は、木下（1991）の研究であるが、「心の理論」をタイトルに含む心理学関連分野の論文をCiNiiで検索してみると、最も古いものは1991年の木下の別の論文と丸野の論文である。その後の論文数（学会報告を除く）は1992年1、1993年0、1994年3、1995年7、1996年3、そして1997年に20と急増するが、これは『心理学評論40』の特集があったためで、ここまで「心の理論」研究は決して活発であったとはいえない。

木下（1991）は人形劇を作成し、そのビデオを3、4、5歳の幼児に見せた。劇のストーリーはサリーとアンの課題と同じである。誤信念課題の通過率は年齢が上がるにつれ上昇した。さらに木下は劇の主人公が誤信念を持つ理由を尋ねた。3歳児では誤信念課題に通過しても無回答か、主人公は本当は物の場所を知っていたという回答が多かったが、5歳児では通過児はもちろん不通過児でも外出していたからという理由を回答した。木下は他者の誤った信念を理解することは4歳より見られたとし、それには他者の知覚経験や行為と認識内容の因果関係を意識化した説明ができない水準1と、それが可能になる水準2があり、水準2は5歳でほぼ達成されるとした。そして5歳になると文脈を越えて論理（因果関係）を意識化する試みが始まるとした。この論文で木下は論文タイトルに「心の理論」を用いていない。後に述べているように、彼は当初より「心の理論」という訳語に違和感を覚えると同時に、誤信念課題による研究が人間の相互理解という現実の状況と乖離したものであるという認識を持っていたのではないかと思われる。

このように海外の研究を踏まえつつ、日本では独自の研究が行われた。郷式（1999）はスマーティ課題の追試を行った。この課題は、まずスマーティという菓子の箱に何が入っているかを子どもに尋ねる。子どもはスマ

ーティと答えるが、中には鉛筆が入っている。次にその子に他児がどのように答えるかを尋ねる。「スマーティ」と答えれば、その子は他者の誤信念を理解していることになる。日本では「スマーティ」は知られていないので、郷式はそれを「ポッキー」に変えた。そしてこの誤信念課題と多義図形課題（子どもに多義図形を見せてそれをおサルさんが何の絵だと思いかと問う）との関連を検討した。郷式は誤信念課題と多義図形課題が同時期に理解されるとしたが、多義図形課題に比べ、誤信念課題の通過率は低く、年少児では16.7%、年中児では27.3%、年長児では47.8%であった。このためかどうか、郷式は実験2では誤信念課題としてサリーとアンの課題を改変したものを用い、質問も「箱の中にパトカーが入っている（実はバスが入っている）と思うのは誰？」とした。その結果、年少児は46.2%、年中児は60.0%の通過率となったが、これは本来の誤信念課題とは異なるものであり、誤信念課題を通過したといえるかどうか疑問である。

郷式の論文タイトルも「幼児における自分の心と他者の心の理解」であり、副題にあるように「心の理論」課題（誤信念課題とそれを改変した課題）を用いてはいるものの、その目的は「心の理論」の検討ではない。日本の研究者の多くは、郷式のように「心の理解」の発達を明らかにすることを目的とし、そのために「心の理論」の指標である誤信念課題を用いた。日本においては海外のそれとは異なる独自の研究が進んだといえるが、「心の理論」研究としてはオーソドックスなものではなかった。

2. 「心の理論」と「心の理解」

「心の理解」というテーマはいつ出てきたのか。CiNiiで検索すると、発達心理学分野では1995年の木下の論文からである。その後、1997年の『心理学評論40』の特集において複数の論文が「心の理解」をタイトルに用いているが、唐突の感は否めない。木下（1997）はこの特集の中で次のように述べている。

「心の理論」は必要か（山本）

「心の理論」とは、きわめて魅力的なネーミングである。しかし、その中軸をなしてきた「誤った信念」課題を目の当たりにして、『心の理論』って、“過大広告”じゃあないか」と違和感を覚えた方も多いと思う。

これは後に木下（2013）が述べているように、自身の違和感を述べたものである。続けて木下は、『心理学評論 40』の中の麻生、遠藤、中野の3論文が「過大広告」の汚名を拭い去るものだとしているが、麻生は乳幼児期の「ふり」、遠藤は自他の理解、中野は共感をテーマとしており、より大きなテーマを扱っていることが明らかである。木下が「過大広告」というのは、誤信念課題という手軽な課題で「心の理論」という他者理解につながる重要な能力を測ることができるのかという疑問であろう。麻生らは誤信念課題による「心の理論」研究という狭い枠組みを超えたテーマを掲げている。

その中で遠藤（1997）が紹介しているエピソードは興味深い。遠藤は保育園でスマーティ課題を試みた際、誤信念を持つのが誰なのかということに何人かの被験児がこだわったことを紹介している。その子たちは、それがもしいつも先生と一緒にいる子だとしたら、箱の中に何が入っているかを教えてもらっていると考えたというのである。遠藤が指摘しているように、「心の理論」課題はサリー-アン課題にしてもスマーティ課題にしても、被験児にとって特別な意味を持つ他者の心を推論させるものではない。極端に言えば、見ず知らずのサリーやお話の中の動物が何を考えているかなど、被験児にとってはどうでもよいことであり、チョコレートの箱に実は鉛筆が入っており、それを知らないはずの他者が見事に中身をいい当ての方が答えとして面白く、質問者を喜ばせると被験児は考えたのかもしれない。そのような可能性を考えると、誤信念課題が心の理解のリトマス試験紙になりえないのは至極当然のことである。

「心の理解」に関する発達心理学的研究は2000年以降増加するが、目立

つのは障害児の研究である。西原ら（2006）は広汎性発達障害児を対象とする「心の理解」の発達支援に関する検討を行い、その冒頭で次のような概念整理を行っている。

広汎性発達障害児では、「他者の心的状態（思考、信念、欲求、意図等）を推測したり、この推測に基づいて他者が言ったことを解釈したり、他者の行動を理解したり、予測したりする能力」（Howlin, Baron-Cohen, & Hadwin, 1999）と定義される、他者の「心の理解」の獲得の困難性が指摘されており（Baron-Cohen, 1995）、その発達支援が課題になっている。従来このような能力については「心の理論」という用語でも言及されるが、「心の理論」という用語は、限定的に、通常4歳後半以降に可能になる誤信念理解（他者の誤った「思い込み」の理解）を意味することも多い。

この西原らの見解は適切なものであると思われる。「心の理論」という名称は他者の心の理解という広汎な能力を思わせるが、実は誤信念課題によって測定される能力を指しており、おそらく他者の心の理解のごく一部に過ぎない。それゆえに木下は「過大広告」と称したのであろう。西原らは誤信念課題に不通過であった広汎性発達障害の小学生男児に対し、「宝さがしゲーム」を通した指導を行った。その結果、誤信念課題はやはり不通過であったが、「見ることが知ることを導く」原理の理解や心的状態に関する発話が増加するなどの変化が見られた。西原らは誤信念課題が不通過であった理由として、Bloom & German（2000）の見解をもとに、被験児が物語に興味を示さず、物語理解に困難を示していたことを挙げている。「見ることが知ることを導く」原理の理解や心的状態に関する発話が「心の理解」といえるかどうかはともかく、これらは「心の理論」とは別の能力の現れと考えるのが妥当であろう。

Bloom & German（2000）は、大きく2つの理由から、誤信念課題で「心の理論」を測ることに反対した。1つは、誤信念課題が「心の理論」

「心の理論」は必要か（山本）

以外の能力、たとえば物語への興味や物語を正確に記憶する能力などを必要としていることである。もう1つは、「心の理論」を誤信念の推論だけに限定する必要はないという見解である。後者については、日本の研究者も同様であると思われ、西原らのように「心の理解」というテーマで研究を進めている。では、前者については日本の研究者はどのような見解を持っていたのか。西原らは Bloom & German を引用して誤信念課題の困難性を指摘し、内藤（2007）は Bloom & German の指摘を受けてただ1つの誤信念課題を「心の理論」獲得の判定基準とすることは妥当性に乏しいとしているが、日本の研究でこの問題に触れているものは他に見当たらない。Bloom & German は誤信念課題による「心の理論」研究を否定しているのであるから、無理もないことではある。

誤信念課題についてのこのような問題点が指摘されている一方で、これをさらに困難にした「二次誤信念課題」なるものが考案されている。「Aは～と思っている」という推測が一次の「心の理論」であるとする、二次の「心の理論」は「Aは『Bが～を知っている』と思っている」という推測であり、それを測るのが二次誤信念課題である（林，2013）。

3. 誤信念課題へのスタンス

林（2013）によれば、二次誤信念課題は児童期の「心の理論」の発達を調べるものであるが、この課題を用いた研究は多くは見当たらない。論文としては、林（2002）と溝川・子安（2008）などである。これは児童期の「心の理論」に対する関心の低さの現れともとれるが、紹介してきたように、誤信念課題への疑義が多数指摘されているためであるように思われる。そこで日本の研究者が誤信念課題をどのように評価しているのかを整理してみたい。

内藤の評価は、冒頭で紹介したように全面否定である。これとは対照的に、郷式（2013）は誤信念課題について次のように述べている。

心の理論研究において、他の人もしくは自分の心の理解のしくみ、また、その理解の発達を調べるための中心的な課題が、誤信念課題です。

郷式は「心の理論」と「心の理解」を同じものとしており、それも問題であるが、誤信念課題がそれを調べるための中心的課題であると位置づけている。内藤とは正反対の評価といえる。

木下の研究対象は「心の理論」ではなく「心の理解」というべきであるが、誤信念課題については次のように述べている。

一つ注意しておきたいのは、これらの研究では誤信念課題などの検査課題の通過でもって、心の理解が扱われていることです。いわば、「試験問題」を解くようなものとなっています。しかし、現実の心の理解は、毎日の生活において“ホットな”問題として直面されているものです。（中略）誤信念課題で測定される能力が導かれるプロセスにもっと目を向けて、実際の社会的諸関係で起こっている“なま”の事象を拾い上げることは、よりいっそう重要な課題となるでしょう。（木下，2013）

誤信念課題を用いることを否定してはいないが、それだけでは不十分であるということであろう。木下自身の研究が誤信念課題だけに依拠したものではないことから、彼の見解は一貫していることがうかがえる。

児童を対象とした二次誤信念課題が作られる一方で、乳児を対象とした誤信念課題も作られている。Onishi & Baillargeon (2005) は、乳児に登場人物が見ていない間におもちゃがある箱から別の箱に移される場面を見せた後、登場人物がおもちゃが最初に入っていた箱に手を伸ばす場合と、実際に入っている箱に手を伸ばす場合を見せたところ、乳児は後者の方をより長く注視するという結果を得た。このことから、乳児が「登場人物は最後におもちゃを見た場所に手を伸ばす」という期待を持っていると考え

「心の理論」は必要か（山本）

た。この解釈にも無理があるように思われるが、この課題を「自発的な誤信念課題」と呼ぶのは不適切であるように思われる。この課題は誤信念課題とは似て非なるものである。オリジナルの誤信念課題を改変し、それを新しい誤信念課題として用いることは郷式（1999）においても見られたが、このような研究者の行為は研究方法の工夫ではあるものの、誤信念課題の信頼性を危うくするだけでなく、「心の理論」研究に混乱をもたらすものと思われる。研究者が恣意的に課題を改変し、それを誤信念課題と称して用いるのであれば、「心の理論」という概念そのものが意味をなさなくなる恐れがある。

このような危惧や否定的見解が存在する一方で、誤信念課題を主たる研究方法とする「心の理論」研究は続けられている。現在も誤信念課題を主たる研究方法としているのは郷式や林らである。内藤は誤信念課題を中心に研究を進めてきたが、誤信念課題に否定的な見解を持つに至る。最近では、溝川・子安（2011）や小川・高橋（2012）が、誤信念課題と他の課題を用いて、幼児の社会的相互作用と「心の理論」の関連について検討を行っている。溝川ら（2011）は一次と二次の誤信念課題とSDQ（社会的相互作用尺度）、隠された感情課題の関連について調べたところ、一次誤信念課題と隠された感情の理解、一次誤信念課題と社会的相互作用の間に有意な偏相関が見られた。しかし、隠された感情の理解と社会的相互作用の間に関連は見られなかった。小川ら（2012）は誤信念課題とふり遊び、役割遊びの関連について実験的に検討したところ、誤信念課題と役割遊び課題の間に有意な相関が見られた。これらの研究も誤信念課題を主たる研究方法とするものである。小川らが用いた誤信念課題はオーソドックスなスマーティ課題と不意移動課題であるが、溝川らの課題は、動物の人形を用い、その動物の信念を幼児に質問するものであった。なぜこの課題を用いたのかは述べられていないが、溝川らが「心の理論」を感情理解をも含んだものとしてとらえようとしていることと関係があるのかもしれない。「心の理論」を他者の感情理解をも含んだものとしてとらえようとする研

究は「心の理解」の研究とも呼べるが、感情理解の研究とした方が明確である。

東山（2007）は、「心の理論」に感情理解も含めるべきであるという Wellman & Liu（2004）の主張に基づき、Wellman らの作成した課題を日本の幼児に実施した。年齢とともに課題の通過率も上昇したが、Wellman らの得た結果に比べ、通過率が5～20%ほど低く、特に4歳児の通過率の低さが目立った。この研究で用いられた感情理解の課題は、Real-Apparent Emotion という課題で、友達に意地悪された登場人物が、自分の本当の気持ちを知られると“弱虫”といわれるので、本当の気持ちを隠そうとしたことを子どもに話し、意地悪された登場人物が本当はどんな気持ちか、どんな表情をしているかを問うというものである。Wellman らの研究では全年齢の通過率は32%であったが、東山の研究では15.8%で、他の誤信念課題に比べ著しく低かった。感情理解を含めた「心の理論」という考え方は魅力的であるが、Wellman らの感情理解課題は誤信念課題よりもはるかに難易度が高く、この課題で測られるものと誤信念課題で測られるもの間には大きな隔りがあると思われる。その後、誤信念課題との関連が認められる有力な感情理解の課題が開発されていないことから、「心の理論」に感情理解を含める試みは失敗に終わったと考えるのは早計であろうか。

4. 「心の理論」と自閉症

「心の理論」が広く知られるようになったのは、自閉症に関する「心の理論」欠損仮説によるところが大きいと思われる。先に述べたように、Naito ら（1994）は日本で最初に誤信念課題を用いてこの仮説の検証を行った。しかし、2013年の『発達135』の特集において、内藤はこの仮説の問題点を3つ挙げている。第1に、自閉症児の中には、言語精神年齢が11歳頃になるとこの課題に通過してしまう者がいること。第2に、通常

「心の理論」は必要か（山本）

の誤信念課題に失敗するのは自閉症児ばかりではなく、視覚あるいは聴覚障害児でも、この課題に著しい困難を示すこと。そして第3に、定型発達児でも「心の理論」の発達は一様ではなく、階層や文化によって差が見られ、日本の子どもは欧米の子どもより課題達成が2年近く遅れることである。このことから内藤は「心の理論」発達の定型性自体が疑問視されていると述べている。

この他に『発達135』において、「心の理論」と自閉症の関係について触れているのは、子安、郷式、別府、熊谷である。先に述べたように、子安は「心の理論」の欠損が自閉症児固有の特徴ではないという Gernsbacher ら（2005）の見解を紹介している。『心理学評論40』（1997）において子安は、「心の理論」が自閉症の子どもたちの心理を解明する可能性を持ったものであるとしていたが、その期待は裏切られた。

郷式は「心の理論」と実行機能（executive function の訳語）の関連に関する研究を紹介する中で、その源が自閉症研究にあるとし、次のように述べている。

自閉症の中核的な障害として、心の理論に問題があるのではないか、という「心の理論欠如説」が提案されたこともありました。確かに、自閉症の人はコミュニケーションの困難を示します。（中略）一方で、自閉症の人の抱える別な問題として、こだわりやパターン化した行動があります。この問題は、直接に他者の意図や感情の理解が必要となるコミュニケーションの問題とは異なり、実行機能に関する困難が根底にあるようです。（郷式，2013）

要するに、自閉症にはコミュニケーションの困難と実行機能の困難があり、その関連について研究する必要があるということであるが、「心の理論」欠損仮説については過去のものという認識のようである。また、別府も「心の理論」欠損仮説に異を唱えている。

自閉症児者における心の理論欠損仮説は、社会性に関するさまざまな問題行動を説明可能なことから、多くの注目を集めてきました。（中略）しかし特に自閉症の事例を丁寧に見てみるとそこには、心を巡る複数の次元が区別されていないという問題が隠されていると思われます。（別府，2013）

そして別府は自閉症の「心の理論」の欠損とされている事例が、むしろ情動調整の障害としてとらえられるとし、次のように述べている。

心の理論（theory of mind）は本来その用語が示すように、認知的な心（mind）を扱うものです。心の理論を測定する代表的課題である誤信念（false belief）課題は、登場人物の信念を推理させます。一方実際の生活では、相手が自分の言動を嫌がっている、あることを考えて嬉しいと思っているという、情動（emotion）を伴った心を理解する場面は少なくありません。（中略）心の理論は、心を推測する理論という枠組みを前面に出すことで、その心の内容—認知的か、情動的か—を不問に付してきました。そのため、心の理論を獲得すれば、認知的な心も情動的な心も同じように理解可能だとし、両者を特にわけることなくとらえてきたと考えられます。（別府，2013）

この指摘の通り、「心の理論」が情動的側面を捨象したものであることは明らかである。しかしこの文章では、認知的な心と情動的な心を分けることなくとらえてきたのは「心の理論」研究者であるということがはっきり述べられていない。その大きな原因は「心」という曖昧な用語を用いたことにある。木下はこの訳語を用いたことについて次のように述べている。

Theory of mind は「心の理論」としか訳しようがなかったのですが、

「心の理論」は必要か（山本）

発達心理学や認知心理学で情報処理モデルが最先端であった当時、「こころ」というタームを研究テーマとして標榜することに、何か落ち着きの悪さと同時に、魅惑的な雰囲気を感じました。（木下，2013）

「心の理論」という和語にするより、「セオリー・オブ・マインド」の方が他者の認知に関する推論というニュアンスが伝わりやすいように思われる。木下は「心」という訳語については次のように述べている。

“mind”は心の認知的働きを意味するのに対して、「心」の場合、情緒的な側面がイメージされやすい。“theory of mind”研究は、正確に言えば、心の認知的働き一般に関する理解を扱ったものであるのだが、「心の理論」というと、さまざまな感情や情動に彩られた、個々人の思いや通い合わせが想定されやすいだろう。（木下，2005）

木下も認識しているように、「心の理論」という訳語では、他者の認知も感情もわかるという意味にとれる。落ち着きの悪さはもちろんのこと、魅惑的どころか非科学的とも思える。せめて「心の推論」と訳しておけば誤解は減ったかもしれないが、「心の理論」という訳語を用いたことの影響は大きかった。そのことを配慮してか、木下は「心の理論」について警鐘を鳴らし続けている。

一方、熊谷は「心の理論」について次のように述べている。

「心の理論」は人と人が心を交わすことを可能にする重要な心の働きであり、通常、四～五歳から形成されるといわれています。しかし、それは、その年齢になって突然現れるのではなく、その前からの心の働きとつながりを持って生まれてくるはずです。そのつながりを作っているのが、一歳前後に形成される三項関係であると考えられます。そして、「心の理論」とは、この三項関係の発展型であり、それが複合的な形で現れたものである、

とするのが本論の主旨です。（熊谷，2013）

熊谷は「心の理論」が三項関係の発展型であるとし、自閉症児はその成立が遅れるとして、「心の理論」欠損仮説を支持する立場を表明しているが、彼の見解にはいささか問題があるように思われる。熊谷は「心の理論」を「人と人が心を交わすことを可能にする重要な心の働き」としているが、「人と人が心を交わす」というのは感情の理解も含んだコミュニケーション全般を指しているのとれる。別府が指摘した認知と感情を分けないとらえ方である。

それはともかく、熊谷の見解で重要なのは、「心の理論」を「三項関係」の発展した形としていることである。三項関係とは、1歳前に現れる「子ども・大人・対象」の関係である。具体的には指さしや物の受け渡しのような形で現れ（「共同注意」とも呼ばれる）、やはり自閉症児においてその出現が遅れるとしている。熊谷は「心の理論」も「共同注意」も、さらにはウィスコンシン・カード分類テストも、自閉症児においてそれらの発達が遅れるのは、すべて三項関係の未成立によって説明できると主張する。この見解は次のように理解できる。

これまでの知見から、「心の理論」＝誤信念課題をクリアする能力は、熊谷が述べているように複数の能力の複合体であり、藤野（2013）も指摘しているように、その中核は言語能力であると推測される。「モーガンの公準」（行動をできるだけ単純なメカニズムで説明するという動物行動学の原則）を適用すれば、定型発達幼児が誤信念課題をクリアできないのは、主に言語能力の未発達によると考えられる。自閉症児の場合には、それを言語獲得以前の三項関係、共同注意にまで遡ることができる。

筆者の経験では、臨床場面で誤信念課題を実施できるような自閉症児にはなかなか出会わない。多くの自閉症の幼児・児童には知的障害や言語の障害があり（思春期以降、急速に発達するケースがある）、誤信念課題の教示を理解できないし、注意を向け続けることすらない。誤信念課題の実

「心の理論」は必要か（山本）

施は、高機能自閉症やアスペルガー障害なら可能であるかもしれないが、実際に自閉症とされる幼児や児童に対して実施できる機会はほとんどない。「心の理論」欠損仮説は、そういう自閉症児を現実に見たことはないが、きつといるに違いないし、目の前の自閉症児もそうかもしれないと思わせる魅力的な仮説であった。しかし、「心の理論」という複合的な概念を用いずとも、自閉症の障害は言語能力の障害で説明できることが多いし、アスペルガー障害のように言語能力に障害がなさそうに見える場合には、別府が主張するように、「心の理論」よりも感情理解の問題としてとらえる方が適切であるように思われる。

5. 発展か混迷か

30年に及ぶ日本の「心の理論」研究の歩みは、発展ととらえてよいのか、それとも混迷ととらえるべきなのか。小論の見解は後者である。その理由はすでに述べてきたが、改めて整理しておく。

まず、30年の研究において、有益な知見が得られなかったということ了指摘しておかなければならない。得られたのは否定的な知見ばかりである。「心の理論」という概念あるいは訳語の曖昧さや、誤信念課題の問題が指摘され、さらに自閉症の「心の理論」欠損仮説の問題点が明らかにされた。これらはすべて「心の理論」に否定的な知見である。特に、自閉症の「心の理論」欠損仮説に関する否定的知見は、「心の理論」の存在意義をほとんど無にするものであったと思われる。

多くの研究者は誤信念課題によって測られる「心の理論」だけでは物足りない、あるいは心許ないと考えたのであろう。誤信念課題以外の方法で「心の理解」を探ろうとしたり、「心の理論」に感情理解を含めようとしたりしたが、それらの試みは成功したようには見えず、さらに混乱を広げようように思われる。最近では、「心の理論」と「実行機能」の関連を探ろうという動きがある。実行機能とは、抑制制御、認知的柔軟性、作動記憶な

どから構成される複合的機能である。郷式（2013）は、誤信念課題の達成には「心の理論」に加えてこの実行機能が必要なのではないかとし、「心の理論」と実行機能が脳の同じ領域で処理されている可能性があるとしている。しかし、これは「屋上屋を重ねる」というものであり、誤信念課題が「心の理論」研究の中心的課題であるという主張と矛盾するように思われる。「心の理論」研究は30年を経てますます混迷の度を深めたといえるのではなかろうか。

その中で、冒頭で紹介した内藤の表明は研究者として潔いものといえる。内藤らは日本で最初に自閉症の「心の理論」欠損仮説を支持する結果を得たにもかかわらず、その後、次のような見解を持つに至る。

心の理論獲得のリトマス試験紙と言われてきた誤信念課題達成だけをとってみても、欧米でも、母親を含む大人や子ども同士のやりとりと関連した大きな個人差がみられる（内藤，2007に展望）。また少なくとも日本の子どもの誤信念課題の達成様相（Naito & Koyama, 2006）も、他の心の理論課題との相対的な達成順序（東山，2007）も、欧米の報告とは大きく異なっている。さらに日本でも欧米でも誤信念課題の異なるバージョン間や他の心の理論課題との関連性は多くの場合非常に低く（例えば、Hughes, 1998; Naito, 2003）、誤信念理解を限定的な認知能力としてみても、他機能（例えば実行機能や自己体験的意識）との関連性も日本人では一貫しない（Naito, 2003；小川・子安，2008；寺地，2007）。こうした見解を冷静に重ね合わせれば、誤信念課題や心の理論課題が心の理解のリトマス試験紙になりえないことは明らかである。（内藤，2011）

また、内藤は欧米の研究動向に敏感で、同じ論文の中で次のように述懐している。

問題は、少なくとも現在の所、日本からのこうした問題関心による発信

「心の理論」は必要か（山本）

が欧米のジャーナル共同体にほとんど届かない徒労感とどう闘うかである。そこには、欧米の発達心理学雑誌の多くの編集者と査読者がもつ堅牢な学問的心理学と欧米固有の常識心理学という壁が横たわっている。

これは一般論であるが、「心の理論」研究に当てはめて考えると、日本の研究は欧米のそれと乖離してしまっているということであろう。この乖離は“theory of mind”を「心の理論」と訳した時から始まっていたのである。そしてこの訳語を用いた木下は『発達 135』の特集論文を次のように締めくくっている。

もしも幼児が早期から他者の心中を察することを強いられるなら、子どもは自信を喪失し、新たな活動を広げる動機は限りなく縮小するのではないでしょうか。（中略）「何のため」の「心の理論」なのかを問うことは、研究と実践の双方の発展に不可欠なものであるとして、本特集の後半の議論にバトンを渡したいと思います。（木下，2013）

無難に締めくくっているが、これは重要な指摘である。「心の理論」への決別宣言ともとれる。もはや「心の理論」の存在意義はなくなったかのように思える。

一方、子安（2013）は「心の理論」の意義を次のように述べている。

すなわち、「心の理論」は幼児期から児童期の子どもにとって大変重要な発達課題であり、このことを知らずして、子どもの養育、保育、教育、臨床などの十分な実践活動はできないということです。たとえば、他の子どもに危害を与えたり、悲しくつらい思いをさせた子どもに対して、「○○ちゃんの気持ちになってごらん」と諭しても、自分が被害を受けていなかったり、特に悲しくも苦しくも感じなければ、そのような説諭はなかなか子どもの心に届きません。また、自閉症児が「心の理論」の理

解に困難があることを知らないと、やはり説諭が心に届かず、単にわがまま、自分勝手、横着、不作法な子どもと誤解してしまいます。（改行省略）

この説明は先に紹介した子安自身の研究レビューと矛盾するものである。その意義を強調しようとするあまり、「心の理論」を正しく説明していない。「心の理論」を幼児期から児童期の重要な発達課題であるとしている研究者は他に見当たらないし、多くの研究者が指摘しているように、従来の「心の理論」には他者の気持ちや感情の理解は含まれていない。また、自閉症児だけが「心の理論」の理解に困難があるという仮説も、今では支持する研究者は少ない。さらに、このような説明は「心の理論」を獲得すれば人間関係をうまく築くことができるかのような誤解を与えかねない。「心の理論」研究の成果を正確に理解すれば、「心の理論」に関する知識が子どもの養育、保育、教育、臨床に必要なものであるとは考えにくい。

小川（2013）は「心の理論」研究と保育実践の関係について次のように述べている。

これらの研究の知見を保育実践と結びつけて考えるとき、「心の理論」の発達が、子どもの作り上げいく人間関係の中身とどのように結びつくのか、また保育の中の子ども理解に、「心の理論」研究をどのように生かすことができるのかということについては、さらなる検討の必要があります。

やはり「心の理論」研究が保育実践にどのように結びつくのかは明らかではないのである。

小論はこれまでの研究を否定するものではない。これまでの研究によって、子どもの教育や臨床に必要なのは「心の理論」の研究ではなく、言語能力や感情理解の研究であり、もしかすると実行機能の研究かもしれないということが明らかとなった。少なくとも誤信念課題を用いた「心の理論」研究は終わったというのが小論の結論であるが、その一方で新しい研

「心の理論」は必要か（山本）

究が始まっていることは注目される。千住（2013）が紹介している乳児の他者理解の研究や、誤信念課題と実行機能の関係についての研究などがそれに当たる。

引用文献

- Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37-46.
- Bloom, T., & German, T. P. (2000). Two reasons to abandon the false belief task as a test of theory of mind. *Cognition*, 77, 25-31.
- 遠藤利彦（1997）. 乳幼児期における自己と他者，そして心—関係性，自他の理解，および心の理論の関連性を探る— *心理学評論*, 40, 57-77.
- 藤野博（2013）. 発達障害における基礎研究と臨床への応用：自閉症スペクトラム障害と心の理論の視点から *発達心理学研究*, 24, 429-438.
- Gernsbacher, M.A., & Frymiare, J. (2005). Does the autistic brain lack core modules? *Journal of Developmental and Learning Disorders*, 9, 3-16.
- 郷式徹（1999）. 幼児における自分の心と他者の心の理解—「心の理論」課題を用いて— *教育心理学研究*, 47, 354-363.
- 郷式徹（2013）. 「心の理論」と実行機能—どのような認知機能が誤信念課題に必要か？ *発達*, 34 (135), 36-41.
- 林創（2002）. 児童期における再帰的な心的状態の理解 *教育心理学研究*, 50, 43-53.
- 林創（2013）. 児童期の「心の理論」—大人へとつながる時期の教育的視点をふまえて *発達*, 34 (135), 23-29.
- Howlin, P., Baron-Cohen, S., & Hadwin, J. (1999). *Teaching children with autism to mind-read: A practical guide*. Huppauge, NY: John Wiley & Sons.
- Hughes, C. (1998). Executive function in preschoolers: Links with theory of mind and verbal ability. *British Journal of Developmental Psychology*, 16, 233-253.
- 木下孝司（1991）. 幼児期における他者の認識内容の理解—他者の「誤った信念」と「認識内容の変化」の理解を中心に— *教育心理学研究*, 39, 47-56.
- 木下孝司（1995）. 乳児期における「心の理解」の始まりをめぐって：「心の理論」

- 説に対する反論 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇, 46, 205-218.
- 木下孝司 (1997). 麻生・遠藤・中野論文へのコメント 心理学評論, 40, 95-96.
- 木下孝司 (2005). “心の理解” 研究の新しいかたち 遠藤利彦編著 発達心理学の新しいかたち 161-185. 東京: 誠信書房.
- 木下孝司 (2013). 幼児期の「心の理論」—心を理解するということが“問題”となるとき 発達, 34 (135), 16-22.
- 子安増生 (1997). 巻頭言: 「心の理論」の特集にあたって 心理学評論, 40, 3-7.
- 子安増生 (2013). 総論 いまなぜ「心の理論」を学ぶのか 発達, 34 (135), 2-8.
- Milligan, K, Astington, J. W., & Dack, L. A. (2007). Language and theory of mind: Meta-analysis of the relation between language ability and false-belief understanding. *Child Development*, 78, 622-646.
- 溝川藍・子安増生 (2008). 児童期における見かけの泣きの理解の発達: 二次的誤信念の理解との関連の検討 発達心理学研究, 19, 209-220.
- Naito, M. (2003). The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autonoetic consciousness. *Journal of Experimental Child Psychology*, 85, 312-336.
- Naito, M., Komatsu, S., & Fuke, T. (1994). Normal and autistic children's understanding of their own and other's false belief: A study from Japan. *British Journal of Developmental Psychology*, 12, 403-416.
- Naito, M., & Koyama, K. (2006). The development of false belief understanding in Japanese children: Delay and difference? *International Journal of Behavioral Development*, 30, 290-304.
- 内藤美加 (2007). 心の理論研究の現状と今後の展望 日本児童研究所編 児童心理学の進歩, 46, 1-37. 東京: 金子書房.
- 内藤美加 (2011). “心の理論” の概念変化 心理学評論, 54, 249-263.
- 内藤美加 (2013). 自閉症児の「心の理論」—マインド・ブラインドネス仮説とその後の展開 発達, 34 (135), 60-65.
- 西原数馬・吉井勘人・長崎崎 (2006). 広汎性発達障害児に対する「心の理解」の発達支援: 「宝さがしゲーム」による「見ることは知ることを導く」という原理の理解への事例的検討 発達心理学研究, 17, 28-38.
- 小川絢子 (2013). 「心の理論」と保育—保育の中子どもたちみる心の理解 発達, 34 (135), 42-47.
- 小川絢子・子安増生 (2008). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性—ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に— 発達心理学研究, 19, 171-182.
- 小川真人・高橋登 (2012). 幼児の役割遊び・ふり遊びと「心の理論」の関連 発達心理学研究, 23, 85-94.

「心の理論」は必要か（山本）

Onishi, K. H., & Baillargeon, R. (2005). Do 15-month-old infants understand false beliefs? *Science*, 308 (5919), 255-258.

Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, 1, 515-526.

千住淳 (2013). 乳児期の「心の理論」—赤ちゃんはどこまでわかっている? 発達, 34 (135), 9-15.

寺地泰裕 (2007). 幼児における抑制能力の発達および心の理論との関連 上越教育大学大学院学校教育研究科修士論文

東山薫 (2007). “心の理論”の多面性の発達—Wellman & Liu 尺度と誤答の分析— 教育心理学研究, 55, 359-369.

Wellman, H. M., & Liu, D. (2004). Scaling of theory-of-mind tasks. *Child Development*, 75, 523-541.